台東区立旧東京音楽学校奏楽堂

公開日：日・火・水曜日(木・金・土曜日はホール使用のない場合公開)
時　間：午前9時30分～午後4時30分(最終入場は午後4時)
休館日：月曜日(月曜日が祝休日にあたる場合は、その翌平日)
　　年末年始(12月29日から翌年1月3日まで)
入館料：一般300円 / 小・中・高校生：100円
所在地：東京都台東区上野公園8－43
電　話：03－3824－1988
ホームページ　http://www.taitocity.net/zaidan/sougakudou/

日本最古の音楽ホール 旧東京音楽学校奏楽堂 公式ガイドブック
令和2年(2020)3月発行
編　集：台東区立旧東京音楽学校奏楽堂
発　行：公益財団法人 台東区芸術文化財団
本書の内容を無断で転載・複製することを禁じます。

日本最古の音楽ホール

旧東京音楽学校奏楽堂
公式ガイドブック

～上野の杜に悠久の時を刻む
クラシック音楽の殿堂～

旧東京音楽学校奏楽堂は瀧廉太郎や山田耕筰といった日本を代表する音楽家たちを数多く育んだ学校建築です。明治23年（1890）に東京音楽学校の校舎として建てられた建物で、2階には日本で最初の西洋式音楽ホール「奏楽堂」があります。学校建築であり音楽ホールでもある当館の見どころを、余すところなくご紹介します。

目　次

旧東京音楽学校奏楽堂の見どころ

建　物 …… 1

パイプオルガン …… 7

展示室 …… 9

コンサートに行ってみよう …… 12

生きた文化財「旧東京音楽学校奏楽堂」 … 14

パイプオルガンをめぐる物語 …… 15

年　表 …… 16

～建物を見学する時のお願い～

これからもたくさんの方に見学していただきながら、建物にとって良い状態が長く保たれるよう、旧東京音楽学校奏楽堂を管理・運営しています。壁や壁紙、カーテン、手すり以外の木部を触ってしまうと、指紋や手の脂などが原因となって、劣化を招く恐れがあります。見学の際にはお手を触れないよう、ご協力のほどお願いいたします。

旧東京音楽学校奏楽堂の見どころ
～建物～

旧東京音楽学校奏楽堂は明治23年（1890）に、東京音楽学校（現在の東京藝術大学音楽学部）の校舎として建てられた学校建築です。音楽ホール「奏楽堂」を備えた二階建ての建物で、音楽学校の校舎ならではの特徴や工夫が見られます。

◇◆ 明治23年頃の東京音楽学校校舎 ◆◇

明治20年(1887)に開校した東京音楽学校の校舎として、現在の東京藝術大学音楽学部の敷地内に建てられました。設計は、国内で数々の学校建築を生んだ山口半六と久留正道です。久留正道は当館の近くにある国際子ども図書館(旧帝国図書館)の設計者でもあります。

◇◆ 現在の旧東京音楽学校奏楽堂 ◆◇

昭和62年(1987)に東京藝術大学音楽学部の敷地から、現在の場所へ移築・復原されました。

◇◆ 屋根の装飾 ◆◇

切妻屋根の三角形の部分(ペディメント)に装飾が施されています。中央に雅楽で使用される大太鼓、左に西洋の楽器である竪琴(ハープ)、右に和楽器の笙を配しています。和と洋の音楽の要素を取り入れ、新しい音楽の創造を目指すという、東京音楽学校の理念が表されています。

◇◆ 瓦葺の屋根 ◆◇

屋根に注目すると、日本の伝統的な瓦葺き(桟瓦葺き)であることが分かります。西洋風の建物ではありますが、日本建築の特徴も見ることができます。

◇◆ 藁束の入った壁 ◆◇

壁の内部

2階の音楽ホールや練習室だった部屋の壁の中には、藁束がぎっしり詰め込まれています。音楽に集中できるよう、外からの音を遮るための工夫です。

◇◆ 窓ガラス ◆◇

ガラスに映る風景が少しゆがんで見えます

損傷のなかった窓ガラスは、明治時代に作られたものを、そのまま使用しています。現在と異なり、手作業でガラス板を作っていたため、波打っていたり、気泡が入っていたりするところが、かえって良い風合いを出しています。

◇◆ 建物内部の装飾 ◆◇

上野公園の中にある明治建築の中でも、当館の装飾はとてもシンプルです。天井部分や扉などのちょっとした部分に草花の文様が施されています。華美ではありませんが、落ち着いた雰囲気を醸し出しています。

◇◆ 2階の音楽ホール「奏楽堂」◆◇

明治30年後半から明治40年前半頃の奏楽堂

かつて瀧廉太郎や山田耕筰をはじめとする日本を代表する音楽家たちが演奏した舞台です。明治23年に奏楽堂が出来た頃は、まだパイプオルガンがありませんでした。ピアノの鍵盤前に座っているのが本居長世、ピアノに寄りかかっているのが山田耕筰です。

◇◆ ホールの天井部分 ◆◇

天井はヴォールト型(カマボコ型)の丸天井になっています。床と天井を平行にしない事で、余計なエコー現象を生じさせないための工夫です。そのほか、四隅の壁が、直角ではなく丸くアール(曲面)がつけられているのも音響的な効果を期待したものといわれています。

◇◆ シャンデリア ◆◇

東京藝術大学から現在の場所へ移築・復原した時、ホールを飾っていたシャンデリアは損失していたため、昔の写真や文献などからシャンデリアの形を調査し、復元しました。

◇◆ カーテンの色 ◆◇

明治時代の奏楽堂では、何色のカーテンが掛かっていたのか、当時の建築資料には記載がなく、写真も白黒のため色を判別することができませんでした。

夏目漱石の『野分』という小説に、奏楽堂の窓に緑色のカーテンがかかっていたという描写があることから、カーテンの色を決定しました。

特集

平成の大工事

昭和62年（1987）に「台東区立旧東京音楽学校奏楽堂」として開館して以来、建物と資料展示を一般公開するとともに、年間200近くの演奏会が開かれました。それから約25年間、旧東京音楽学校奏楽堂は多くの方々に愛されてきましたが、建物の経年劣化が目立つようになり、耐震性能も向上させる必要が出てきました。

そのため平成25年（2013）4月から休館し、建物の劣化具合と耐震性を調査し、重要文化財としての価値を損なわずに工事を進めるための方針を固めました。

その方針に沿って工事は平成27年（2015）から始まり、建物の保存修理と耐震性を向上させる工事のほか、正面玄関の自動ドア設置、ホール客席の取り替えや客席側の窓の防音化、楽屋トイレの新設など、利便性を高める工事も同時に行いました。工事は約3年間にわたって実施され、平成30年（2018）11月に満を持してリニューアルオープンしました。

◇◆ 耐震補強 ◆◇

ホール天井内部

壁の中の補強材

耐震度を調査したところ、ホールの天井部分に補強する必要があったため、屋根裏部分に鉄骨を組むなどして、耐震強度を増すための工事をしました。さらに壁の中にも補強材を入れて地震に強い建物になりました。

◇◆ 自動ドアの設置 ◆◇

外からの強い風が建物内に入るのを緩和するため、正面玄関に自動ドアを設置しました。自動ドアを設置したことにより壁に負担がかからないような工法を採用しています。

◇◆ ホール客席の取り替え ◆◇

新

旧

工事前の客席はクッションが薄く、長時間にわたって音楽を楽しめるものではありませんでした。今回の工事では、座り心地の良い座席に取り替え、より楽な姿勢で音楽を聴くことができるようになりました。

◇◆ 二重窓の設置 ◆◇

車の往来の多い道路に面した窓に、取り外し可能な窓を内側にもう一つ設置して、遮音性を高める工夫をしました。

旧東京音楽学校奏楽堂の見どころ
～パイプオルガン～

当館のパイプオルガンは、大正9年（1920）にイギリスから輸入された楽器で、昭和3年（1928）に奏楽堂へ設置されました。令和2年（2020）で100歳を迎えます。コンサート用としては日本で一番古いパイプオルガンです。奏楽堂が現役の音楽ホールであるように、このパイプオルガンも現役のコンサート用オルガンとして、明るい音色を奏でることができます。

◇◆ パイプオルガンの正面 ◆◇

右側に見える箱はコンソール(演奏台)で、ここに奏者が座って演奏します。

◇◆ コンソール（演奏台）◆◇

コンソール(演奏台)には、三段の鍵盤と足鍵盤があり、これらを駆使して演奏します。

◇◆ ストップ（音栓）◆◇

鍵盤の側面にあるストップと呼ばれるレバーを引くことで、様々な音を出すことができます。クラリネットやトランペットのほか、珍しいところでは尺八といった音色があります。

◇◆ パイプ室の様子 ◆◇

パイプオルガンの裏側には大きな部屋があり、1379本のパイプが所狭しと並んでいます。さながらパイプの迷宮のようです。

◇◆ ふいご装置（送風機）◆◇

パイプ室の1階下には、巨大なふいご装置があり、ここで演奏に必要な風を作って送り込んでいます。

旧東京音楽学校奏楽堂の見どころ
～展示室～

建物の公開日には、1階の展示室も見ることができます。企画展示室では、日本の音楽史に沿ったテーマを設け、資料を展示しています。常設展示室では、東京音楽学校の校舎が、重要文化財「旧東京音楽学校奏楽堂」として再生するまでの歴史を紹介する展示の他、童謡作曲家として活躍した「本居長世」の生涯を辿る展示を公開しています。

◇◆ 企画展示室（展示室1・2）◆◇

普段は唱歌・童謡・芸術歌曲・日本のオペラなど、東京音楽学校を卒業した音楽家たちが遺した作品についての展示を見ることができます。

年に1回~数回、展示替えをして、日本の音楽史をテーマにした企画展示を行っています。

◇◆ 常設展示室（展示室3・4）◆◇

東京音楽学校の歴史や建物に関する資料を展示しています。

◇◆ ブリュートナーピアノ（展示室3）◆◇

ドイツのライプツィヒにあるブリュートナーという会社が、大正12年(1923)に作った貴重なピアノです。通常のピアノは、一つの音に三本の弦が張られていますが、このピアノの高音域には四本目の共鳴弦が張られている点が特徴です。

◇◆ 瀧 廉太郎 像（展示室3・4の間の窓から）◆◇

展示室3と展示室4の間の廊下から、瀧廉太郎像の裏側を見ることができます。瀧廉太郎像の台座の裏側には、作者である朝倉文夫の想いが綴られています。

朝倉文夫作　瀧廉太郎像

◇◆ オルガン模型（展示室4）◆◇

2階のパイプオルガンの機構を再現した模型です。実際に音を出すことができます。鍵盤を押すことで空気がどのように伝わり、パイプから音が出るのか是非体感してみてください。

※2階の音楽ホールで演奏がある場合は模型の稼働を休止します。

♪オルガン模型で弾ける曲♪

ちょうちょ　ぶんぶんぶん
かっこう　メリィさんのひつじ
聖者の行進　などなど

◇◆ 本居長世常設展示（展示室5）◆◇

明治から昭和初期にかけて活躍した童謡作曲家「本居長世」の誕生から晩年までの資料を公開しています。当館で収蔵する音楽資料のうち、本居長世に関する資料が最も多く、充実しています。

本居 長世〈明治18年（1885）～昭和20年（1945）〉

本居宣長を祖とする国学の家に生まれた長世は、音楽を志し、東京音楽学校に入学しました。卒業後、音楽学校でピアノの指導と邦楽研究に携わりながら、歌劇や器楽曲を発表するようになります。やがて童謡を手掛けるようになり〈十五夜お月さん〉〈赤い靴〉〈青い眼の人形〉〈七つの子〉などを立て続けに発表。童謡の第一人者となりました。

音声ガイドのご案内

常設展示をより詳しく楽しめるよう、音声ガイドの貸し出しをしています。音声ガイドではちょっとした裏話や、展示されている楽譜の演奏等を聴くことができます。

料　金：200円（コンテンツを全部聴くと30分ほどかかります）
貸出時間：9時30分～16時（日曜日は9時30分～12時）

旧東京音楽学校奏楽堂の見どころ
～コンサートに行ってみよう～

クラシックの専門ホールとして、旧東京音楽学校奏楽堂では、年間を通して沢山の演奏会が開催されています。明治建築の雰囲気の中で聴く音楽は格別です。是非、奏楽堂の響きを体感してください。

奏楽堂での演奏を心ゆくまでお楽しみいただけるよう、ご来場のお客様にも環境づくりのご協力をお願いいたします。

これであなたもコンサート通！

当館でのコンサートを楽しむためのお約束

♪敷地内での飲食、喫煙は禁止されています。

♪演奏中の写真撮影、録音、録画はお断りします。

♪演奏会が始まる前に携帯電話・スマートフォンなど、電子機器の電源をお切りください。

電源をつけたままにしておくと、着信音が会場内に響いて演奏が中断する、モニターの光が他のお客様の視界を妨げる等の恐れがあります。

♪演奏中、音が出ないようご注意ください。

ホール内での私語、時計のアラーム、プログラムをめくる音、ビニール袋の音は他のお客様のご迷惑となります。

♪演奏中の入退場はご遠慮ください。また遅れてのご来場の場合は係員の指示に従ってお入りください。

※日曜コンサートは演奏中も会場に入ることができますが、お静かにお入りください。

♪演奏後の余韻を楽しむためにも、拍手のタイミングにご配慮ください。

演奏後すぐに拍手をしてしまうと、拍手が音楽の一部のように聞こえてしまいます。

拍手のタイミングは、演奏者が手を下ろした時が良いかもしれません。

♪席に荷物を置かず、手元や足元で保管しましょう。

～おすすめのコンサート～

日曜コンサート

毎月、第1～第4日曜日に開催しているミニコンサートです。第1・3日曜日はチェンバロ、第2・第4日曜日はパイプオルガンを、東京藝術大学の学生が演奏します。1階の展示室も見ることができるので、おすすめのコンサートです。

当館所蔵のパイプオルガンとチェンバロ

【 日曜コンサート 】

開　演：午後2時と午後3時、各回30分程度

料　金：通常の入館料のみ。建物と展示も見ることができます。

チェンバロってどんな楽器？

当館にはパイプオルガンとグランドピアノの他、チェンバロという楽器も所有しています。チェンバロは、17世紀から18世紀にかけてヨーロッパで弾かれていた鍵盤楽器で、パイプオルガンやピアノとは異なる、繊細で優雅な音色が特徴です。

二つの奏楽堂

東京藝術大学奏楽堂

上野公園には奏楽堂と名の付く音楽ホールが二つあります。旧東京音楽学校奏楽堂と「東京藝術大学奏楽堂」です。東京藝術大学奏楽堂は、旧東京音楽学校奏楽堂が移築・復原した後、東京藝術大学音楽学部の構内に建てられました。コンサートにお出かけになる際は、どちらの奏楽堂が会場になっているのか間違えないよう、ご確認ください。

生きた文化財「旧東京音楽学校奏楽堂」

西洋音楽がまだ珍しかった明治20年（1887）、日本で最初の音楽学校「東京音楽学校」が開校し、明治23年（1890）に、日本で最初の音楽ホールを備えた校舎が建てられました。以来、東京音楽学校では、国内外の音楽を研究するとともに、瀧廉太郎や山田耕筰といった日本を代表する音楽家を育みました。

校舎2階の音楽ホール「奏楽堂」では、モーツァルトやベートーヴェン等の作品が日本で初めて演奏され、明治から昭和初期にかけてクラシック音楽の普及・発展において大きな役割を果たしました。

昭和24年（1949）に東京音楽学校が「東京藝術大学音楽学部」に移行してからも、奏楽堂は音楽ホールとして使用されていましたが、次第に建物の老朽化が目立つようになりました。そして、昭和40年代（1965～）には、新たな音楽ホールを学内に建設するために、奏楽堂を解体して他県の博物館へ移設することが決定しました。

そんな折、東京藝大出身の著名な音楽家や建築家たちが昭和54年（1979）に「奏楽堂を救う会」を結成し、現地での保存を訴えました。奏楽堂を救う会と東京藝大との交渉は難航しましたが、台東区が奏楽堂の管理を申し入れたことにより、台東区立の文化施設として、上野公園内に移築・復原することが決定しました。

昭和59年（1984）から奏楽堂は解体され、上野公園への移築・復原工事が開始されました。建築当初の建材で使えるものはそのまま活かし、損傷・紛失した建材は同じ素材で復元する方針で工事は進められ、昭和62年（1987）に移築・復原工事が終了しました。同年10月、かつての東京音楽学校の校舎は『台東区立旧東京音楽学校奏楽堂』として開館し、「生きた文化財」として注目を浴びました。「生きた文化財」とは、歴史的な建物を維持するだけではなく、現役の音楽ホールとして活用することを意味しています。

旧東京音楽学校奏楽堂として開館して以来、東京藝術大学の学生が2階の奏楽堂で定期的に演奏を披露しています。かつて東京音楽学校の学生たちが奏楽堂で切磋琢磨した風景が、現在も続いています。

パイプオルガンをめぐる物語

2階ホール「奏楽堂」の中央に見ることができるパイプオルガンは、奏楽堂が建築された当初、まだ設置されていませんでした。このパイプオルガンの由来を知るには、音楽好きが高じてロンドンまで音楽留学した、紀州徳川家第16代当主、徳川頼貞侯爵のことをお話しなければなりません。

大正3年（1914）、頼貞侯はイギリスのアボット&スミス社にパイプオルガンの製作を発注しました。麻布にあった頼貞侯の自邸に音楽ホール「南葵楽堂」を建てる計画があり、その南葵楽堂にパイプオルガンを設置するためです。当初、南葵楽堂とパイプオルガンは同時期に完成する予定でしたが、第一次世界大戦の影響でオルガンの到着が遅れ、その演奏を聴けるようになったのは、南葵楽堂が完成して3年後の大正9年（1920）でした。

しかし、南葵楽堂でパイプオルガンの音色を愉しむことができたのはごく短期間で、大正12年（1923）の関東大震災で南葵楽堂は損壊し、音楽ホールとしての機能を失ってしまいました。パイプオルガンのみが奇跡的に無事であったため、昭和3年（1928）に東京音楽学校の奏楽堂へ寄贈されました。

東京音楽学校奏楽堂に移設されて以来、日本のオルガニスト育成に大きく貢献したパイプオルガンでしたが、昭和40年代（1965～）には、損傷が激しくなり、演奏に耐えられない状態になっていました。時を同じくして、東京音楽学校奏楽堂の都外移築計画が進められていた中、このオルガンは解体される予定でした。

しかし、東京音楽学校奏楽堂が上野公園内に移築・復原されることとなったことをきっかけに、「奏楽堂のパイプオルガンをよみがえらせる会」が結成され、ついにはパイプオルガンも修理・移設されることとなったのです。昭和62年（1987）、「台東区立旧東京音楽学校奏楽堂」が開館し、パイプオルガンも晴れて演奏可能な形でお披露目されました。

それから25年以上歳月が経ち、建物の老朽化とともに、パイプオルガンもまた修理が必要な状態となっていました。平成27年（2015）から始まった建物の耐震補強・保存活用工事にあわせてパイプオルガンも修理され、平成30年（2018）11月から、パイプオルガンの音色を再び愉しんでいただけるようになりました。

年表

明治23年(1890) 5月	**東京音楽学校（東京藝術大学音楽学部）の本館として建築。**
昭和3年(1928) 9月	**徳川頼貞侯より東京音楽学校奏楽堂にパイプオルガンが寄贈される。**
昭和41年(1966)	**奏楽堂の老朽化が問題視される、昭和50年代まで補修・改修工事を行うが、取り壊しを視野に入れた整備計画も同時に進められる。**
昭和47年(1972)	東京藝術大学、奏楽堂の移築合意書を他県の博物館と取り交わす。
昭和54年(1979) 10月	日本建築学会及び音楽家グループが奏楽堂の現地保存の要望書を文部大臣、文化庁長官、東京藝術大学長に提出。
11月	**芥川也寸志、黛敏郎をはじめとする東京藝術大学（東京音楽学校）卒業生が「奏楽堂を救う会」を結成。**
昭和55年(1980) 2月	**東京藝術大学出身の音楽家が中心となり結成をよびかけ「奏楽堂を救う会」が正式に発足。**
9月	**東京藝術大学、奏楽堂の他県博物館への移転決議。**
昭和56年(1981) 4月	奏楽堂の使用全面禁止。
7月	台東区長、東京藝術大学に奏楽堂の区内（隅田公園）移築保存を申し入れる。
9月	**「救う会」、台東区長に奏楽堂の上野公園移築保存を申し入れる。**
12月	**台東区長、奏楽堂の上野公園移築保存について各関係機関と協議。**
昭和57年(1982) 1月	**東京都知事より、国指定の文化財、一般公開等の条件付きで上野公園移築保存を許可される。**
昭和58年(1983) 2月	奏楽堂の移築保存先を、上野公園内の旧東京都美術館跡地に決定する。

昭和58年(1983) 4月	**東京藝術大学より台東区長へ移築保存を要請。**
7月	**事業主体が台東区となる。**
10月	移築・復原するにあたり奏楽堂及びパイプオルガンの事前基本調査を開始。
昭和59年(1984) 5月	**「奏楽堂お別れの会」が東京藝術大学主催で催される。**
6月	台東区議会、解体工事契約案件を議決。
8月	**奏楽堂の解体工事を開始。**
9月	移築にともなう樹木移植工事を開始。
12月	解体工事完了、各材木、部品等に番号を付して東京藝術大学構内に保管。
昭和60年(1985) 4月	**「奏楽堂のパイプオルガンをよみがえらせる会」結成。**
6月	台東区議会、復原移築工事契約案件を議決、東京都より移築地での設置許可がおりる。
昭和62年(1987) 3月	**奏楽堂移築・復原工事完了。**
9月	**パイプオルガン修復工事完了。**
10月	**クラシック専門ホールとして「台東区立旧東京音楽学校奏楽堂」開館。**
昭和63年(1988) 1月	**国の重要文化財に指定される。**
平成2年(1990) 5月	奏楽堂創立百周年の記念事業として「奏楽堂日本歌曲コンクール」が発足。
平成6年(1994) 5月	奏楽堂日本歌曲コンクール五周年を記念して「作曲部門」が設けられる。
平成25年(2013) 4月	**施設保全のため、旧東京音楽学校奏楽堂休館。**
平成27年(2015) 12月	**保存活用工事開始。**
平成30年(2018) 6月	**保存活用工事完了。**
10月	**パイプオルガン修理工事完了。**
11月	**旧東京音楽学校奏楽堂　リニューアルオープン。**